

梅之介
物語後篇 梅花春水卷之三

東都

南仙笑楚滿人編述

第拾五韵

怨鬼再苦集

蓑文太さハ小紫おう詞こと何なとゆりて疑のぞくいけま。庭にあまひとと植うす
寢ねひしふ。爰ゑよ遠とく。權ごんハも操さが立たて二重にじの室むろを廢へす。すます
乃の玆き住す。想おもくこうと。審しんよ爰ゑよ逃とうく。繫つて文ふみす。惡棍ごくひんいす
四五輩よをよねき。今霄よ云いの簾れらよい。喧けん囂きうふ縛しばくせ。子こ四兵衛よへい
雄おハが飯めし路じよ待ま伏ふ。お駆のすて。妹わいが仇かたとあ且よ。我わが審しん覚かくと要うく
きてくまでゆ。言いふくわて。其その男のは審しんよ。惡ごくひん家いえ。とそと立た飯めしつくぬ。那な
やなああす。子こ四兵衛よへい。這な由ゆと小梅こばい。おも告おほく。を。又また二浦ふたうら屋やの長な

元・180
久

みま語つてく後。ともうまきへと盤し。小燈灯をと。堤傳ひと販りくると侍のつけくろ因が部下の悪漢。とまとどす。うり物をまつてす。突當ると序あると子四兵衛のこゝ麻相せて。赦。一夕と詫へ。行んともう休よ。悪漢等の裳をとくへ付磨。夜道うきがとて。挑燈を勢へ。うがりさへ。もふ廣き。這堤。ふく。人よ。突當る。と。奇怪なり。猪ふれまば頭巾を冠り。うがり我へ。其授きの不礼を極。あやまちとあくべ。不簡せまへたふもあらね。と。その裁のうち。放巾を脱。大つくだのよつて。だつて。院う。赦。くまくど。りよへ正しく。因公。ぐもトの者と。まかせ。う。急げば。う。け。言。枝。わよと。子四兵衛が。太刀。らふ。各方へ。挨拶。

ちの小領巾を着う。うらせへ。甚ふ礼よ。ゆきと。こまく。ふ。深き。細あり。狂げく。ゆく。と。り。どもきく。ぬ。破落戸。と。きう。だ。例を。已り。う。う。迷く。拔運く。斬く。う。是。子四兵衛。其。身。エ。告。と。く。敵持刃の。臂。と。古哥。れん。と。こ。く。る。放巾。誓の。蔭。破。へ。ね。ば。う。く。ぬ。時。能の。武場の。仕宦。ぬ。よ。安か。因が。部下の。奴。ふ。と。見。て。六。燈。自。折。誓。破。う。へ。う。う。這。子四兵衛。が。身。に。う。う。今。ぞ。弓の。猿衣。黄泉の。猿。う。せ。ち。ま。と。片。く。み。預。巾。う。う。う。う。拂。裳。と。在。あ。く。仁玉。並。み。り。む。せ。が。一。も。殺。せ。と。悪。漢。ど。も。が。四。方。う。う。斬。く。わ。る。折。し。も。あ。き。凶。う。う。變。ゆ。る。鳥。が。雀。の。儀。の。雞。子。よ。お。ま。だ。見。少。の。先。を。ち。く。い。拂。み。戰。ひ。し。が。り。う。じ。う。よ。四。兵。房。が。太。刀。朱。

び。皆散くに逸失て岸も波の音のみつけば。手四兵衛も
放て戦とのまざまが急き。我家より飯つ小梅ふすまの下を
物語り。浦屋より「五十才と祥よ告げ。跡の古文さんど執筆
して、這村直公を退止くあるべから。うど小紫が見よ代りて、
たち志す感。一旦ハ見遙せてのうるべ。斯く、因はす何とぞ
底氣味ゆくや有けん何國へ逸失けるどぞ却説唐琴が山野
袖みの病。主人龜次郎が供せて。主のねが在る西
藏。葛飾より飯つ。父源三房が危ふと。ひきゆす日を暮り
あが或日父源兵衛ハ妻うち飯つあり。袖みに向ひゆす。今日
李す。萬の風流を彼の意が窓の席にて晴れ。其女の名は紫

とゆらん。又男の名ハ權ハ。とりひとを度。尙や娘あらわくざる
廣き郭の工事。に谷も無人。あるへけ。何とゆらん。肉の
動といひ今朝の鳥。むふうくまう加え。今まで龜次郎君へ。權
ハと僕名あらへ。坐つても。被とりひ是と。ふたりとうた世の風
貌。内みみて。案へ居ら。ス。手う一走り。また。更の果
と。絶一束。へどり。袖み。よ。袖み。よ。と。さ
り。で。よ。
り。二。宿。一。
と。さ。よ。一。
と。さ。よ。一。
と。さ。よ。一。

是別人うべはあらず主人龍次

、トモテ是別人うべはあらずす

上座かみざを押真おさま。今もよなとくせ

出で。在何なににてや。たゞただて寧ならむ。

業わざよりとあうを身みとりし。袖そで馬ばのとて、病びやく

患かかと假うんす。うみみをひよる。病びやくのとて、

今日きょうも取と。風貌ふうめいがよかろ真まとよし。

糸いとをとと呼よへ。手四しよを陽よう。日ひと一いつ體たい

恙いたずらをぬぬとゆく。老おいおびひとと。

龍次郎りゆうじらうも最面さいめん。何なんとりよよき。絶ぜつてく。さてうむむ。ふを。

源義湯げんぎゆうが更さらよ氣きもつす。龍次郎りゆうじらう君きみの斯このく安やすむ。うむむ。

定さだらく娘むすめをもつつぐるるべ。世よふ巷まち鏡かがみなど偽うそとうそりあり。年とし半はんの間まも胸むねを痛いたりこそ易やすくねままい。此この形かたちのうれ縛とじの言ことひのうままど。一大虛ひろきよを体からだへとあ大害おほきがいを体からだへとせし。針はりなどある
直ただも捧さげよりより。世よのうらし。曲倫くじらんふくく情死じゆしきせて。葬くわ情じゆふとも
有あいやと向むかつらまま三さん箇ご。胸むねもたうさく憂うき愁しゆひ。手四しよ房ぶ、
洞あなをからひ。源義湯袖そで冬ふゆもす。向むかひ言ことひ止とじ。べき塚つかきうね。縛とじの
子細白地こざいしらぢよ物語ものがたりととぞううく。りふも街まちの道みちを遠とおひ。山裏さんり等とう
こそ。權ごんといふ人ひとと情死じゆしきして相暴あいどり。故ゆゑて驪山りやさん逸月寺いつげつじとりり。
蘭若らんじやくは兩箇りやうごが死骸しぞうを埋うめ。比翼塚ひよくづかと名づけ。まの世よまます
煙えんをすすめる眞ま女の境墨きようぼく。人ひとを夢ゆめとせし。

のを告げ。せんその爲め。然て、箇が道をへる事。乃の
歎きを以ひゆ。速めりて、更に。黙止たる。身情を表す
故う。必恨みゆ。國そ源を傍置せしも。こへいひぬる
と。未だものう。權ハとくまふあるす。鶴次郎君の彼は名を
あらわすや。加之小室さむ頃。鶴次郎君の事の情は
あつる。風は波。又。又。外は又。權ハといふ
あり。そまと供役情死せ。月夜。人歌へり。小室は
おづかびと。ひまで。煙花の身と。うつと。老の一。うつ
を。き。惜一泪を。うつと。举と。ふざる。源を。あが。洞を。吹く。子。四。扇。い。緯
の子細を。かづかねば。左。ひき。す。理う。など。全く異人。權

とりよ人あり。まと情死せ。而。眼。權ハと。鶴次郎君の世を
めぐ。假の。名。と。小室が死せ。ハ云々の。狀。ありて。鶴次郎君の
死。死つて。ちくわく。是方始。り。箇様。終。り。ハ云々。
少。宗。が。実。父。ハ。高。階。師。直。と。す。津。の。国。武。庫。川。よ。亡。考。する。被
目。平。次。左。う。と。ら。く。者。ゆ。て。歟。蓑。文。太。と。六。兄。あ。る。の。度。腕。の。患
ふ。く。壯。よ。き。て。上。ハ。と。す。鶴。次。郎。君。と。ま。浮。ふ。へ。る。難。
足。手。つ。所。で。見。と。ら。征。招。よ。鶴。次。郎。君。の。足。を。み。か。り。一。日。晴
よ。百。年。の。食。を。ま。り。赤。茶。の。縁。を。む。び。く。玉。と。け。る。タ。げ。る。最。終
と。ま。る。象。獻。次。郎。君。も。い。と。不。便。又。当。石。を。ま。じ。正。聲。と。切。排。ひ。小
第。も。う。死。續。と。俱。よ。死。續。あ。う。逸。月。寺。暮。と。比。翼。嫁。と。り。不。端。を



桑木。小紫は權と晴元せしと世より傳る。敵よひをあきらめ。深きや魚のうす死みと相と俱よ物語。源義房袖外へ悲歌の頃よむせびよさら。源次郎と四義房が厚情と感い。けり。由岐義房再び源義房袖外よ向ひ。りゆう。其時真よ蓑文太とす。さくらべり。つまど。小紫と。晴も。竊。義四郎の刀と水姿。籠二種。宝あそび。源次郎君の門により。全く小紫が勤功。す。す。皆。さくらべ。蓑文太の命を取らず。さきとその怪しきせんと彼。何國へ。逃走。つまど。遠く。かず。ゆき。ひ邊よ徘徊。す。す。桂。よ。告る者あき。今度ハ。た當て。次。す。他社。さくらべ。と。偕。と。と。穿。を。訊ね。小紫。どく。縛を。結り。且。袖外。病氣。す。幼ひ。習く。

あはれ。あはれ。間は。所よ。あひ。敵の。ひき。と。うねんと。山梅。ゆうと。す。來り。と。子細。と。づき。よ。告て。類み。け。源義房。一。殘ふ。す。わ。が。ど。何。が。儲袖。外。と。ひ。小紫。と。ひ。一方。ゆ。ぬ。ひ。聚。よ。あづ。う。唐琴。の。ゆ。く。と。家。の。ゆ。の。ゆ。だ。り。よ。す。も。ほ。象。よ。止。り。永。く。敵。の。ひ。聚。と。拵。え。く。と。信。ゆ。ふ。管。荷。ふ。そ。源。次。郎。と。四。義。房。ま。歸。い。大。よ。お。び。こ。す。と。り。して。源。義。房。が。か。よ。み。り。そ。日。每。よ。衣。よ。つ。み。粧。と。か。へ。蓑。丈。太。が。初。起。よ。さ。と。ぬ。け。る。ま。り。儲。お。た。因。ひ。の。蓑。丈。太。其。後。ハ。麻。へ。よ。往。と。審。よ。隱。よ。居。て。世。の。き。ぬ。と。う。ぐ。ひ。よ。す。四。兵。湯。游。次。郎。ふ。す。何。国。往。よ。げ。跡。り。ふ。く。見。う。け。ざ。り。け。ま。だ。儲。お。れ。よ。あ。く。我。形。と。屬。く。よ。遠。國。で。す。初。よ。や。と。當。地。と。立。退。く。て。ひ。の。ま。

ベーとあひび其後の彼所宴みゆび居く。御殿の恩年よりてけりが。否も美や夜も。又く我が福靈客をあらん。蓑文太告と白眼名からや蓑文太は年頃放をゆうもあらへ。小串の童室水姿瘦と正持せしゆゑみゆ。幸うるうみ放が殊小室唐琴深次郎よ櫻とくとく名刀と宝鏡をたゞうり取く。鶴次郎よ渡く。是れ今へぬづく物うけ。又く遊まふ其方を西と般へ。吾亥年の齋念とそくすべると或ひへ過ぎあつひ。翁ひ昼夜とも目よきびりて暫くも寐せむ。又或時の怒りにぬく。と鶴身へ喰つきぬどさぬ。ようやままで更る余人の目みへ。又と蓑文太が眼は耳もと苦。む夏丸くねくす。竟お彼の亡靈が食

けりと覚へ。跡よ瘡を発し。次第に腐りて。あくとも疾病の如く。その痛み絶へきて。甚る藤のたの怨魂金糞よ着へて。我を苦害あしよふ露ふねむ。さるく医療を尽せどりて草根木ぼくをぶ死うしんや。後より実の麻病となる。昔の傳へむすべ。火事の火災年縁く松の幹の下く變も落ち眉毛もぬけくけりと。また歎持主の一ト體の變うたる。ひつけの幸ひる。ひつけの世の人とも思はず。かくとけりが蓑文太ハ憂ゆにあひ寧ま歎び居うけり。尚す部下の山賊よ指教して福有の家こみ入せ。金娘残家を掠りとくせける程よ。何不思ひく歎あま世を送りける。ひづく故あや蓑文太靈病と云ひ。後ハ我

多矣も來らず。さるで痛むせざりけど。巴口とふくたうとの支
ヨミト。こすま江戸上を出づる。返く便うち。其後ハ治癒本
色也。その役手にて捨ちきよけど。然次郎子四吉房ら
世ふ存命。あらて限へ。舊へ吾が相暗の妻へ。アリとも枕を
賣つて。嫁難し。アリ渠等が在家をさへ。來ら蜜よ。が
正そ殺し。女股の病ひを除くよあはずと。部下又言。封け。其行
事と拂へ。求めけど。或日一人の小糸蓑文太又肉し。今日ちよすも
萬飾の邊り。彼の子四吉房を取て。主がぬよつと往く。
とその在案を足し届へ。ふきのふやて内より小梅院次郎も居す。指
子ゆりと洋よ告げ。サビ蓑文太ハ大きふ。珍び。蜜よ失なふ。と

其本どもぞやぐへける。

第拾六齒

孝子建本

啓す。子四吉房。次郎亦。一旦ハ義みよつと蓑文太と見廻せしのち。
さるく。其筋を掠め。求むと雖。あらゆ容をも。理う。哉蓑
文太ハ怨魂の如く。相良のうじゆく。真う。途中ふくらや。面分
争ひ。す。ひそく蓑文太とも困り。とも織入あらんや。かしけ。是子四吉房
名。居ねあくみ。或日。次郎。よ。向ひ。やけ。斯く。日毎。遠道を駆け。と
も。當地と。あらん。勞へ。功め。私事。幸ひ。用ひ。も。あき。薦食。う
候。至。お邊の間。す。暫く。星と。こと。さざ。や。一。薦食。ハ。敵。紀。の。地。ヨミト

蓑文太陽と居て。便つよを夏もあらず。彼地はあくとも手りうて。君
ふハ尚も當國よりそへけとさざへあり。その内ふハ袖外と病ひす本服
まくけ是がゆゑ後袖外と同名す。ひ辞よ緒國を昇ねり。本
章は本腰と云ひのむとひす。あらし。我田守のうちへうしく
身と達み木下す。置ふも心とつけ。必勝めが才一毫も。棄てす
煙草とあど一のべべくすと最も多くと言幾。子四三郎ハ發室。ぬ
斯くて田守より游次郎袖外小梅源。湯ホハ日毎。子四三郎が安善
とすも居て。折もし秋の初すて何とく衰えとゆふをじうる
。女。妻ハ衣が塵のひりか。似もやうび。前より鶴田の源。清く。周情
のそとく。もつた僻地。うき。寂莫としての妻。とき々暮ふ小舟ハ

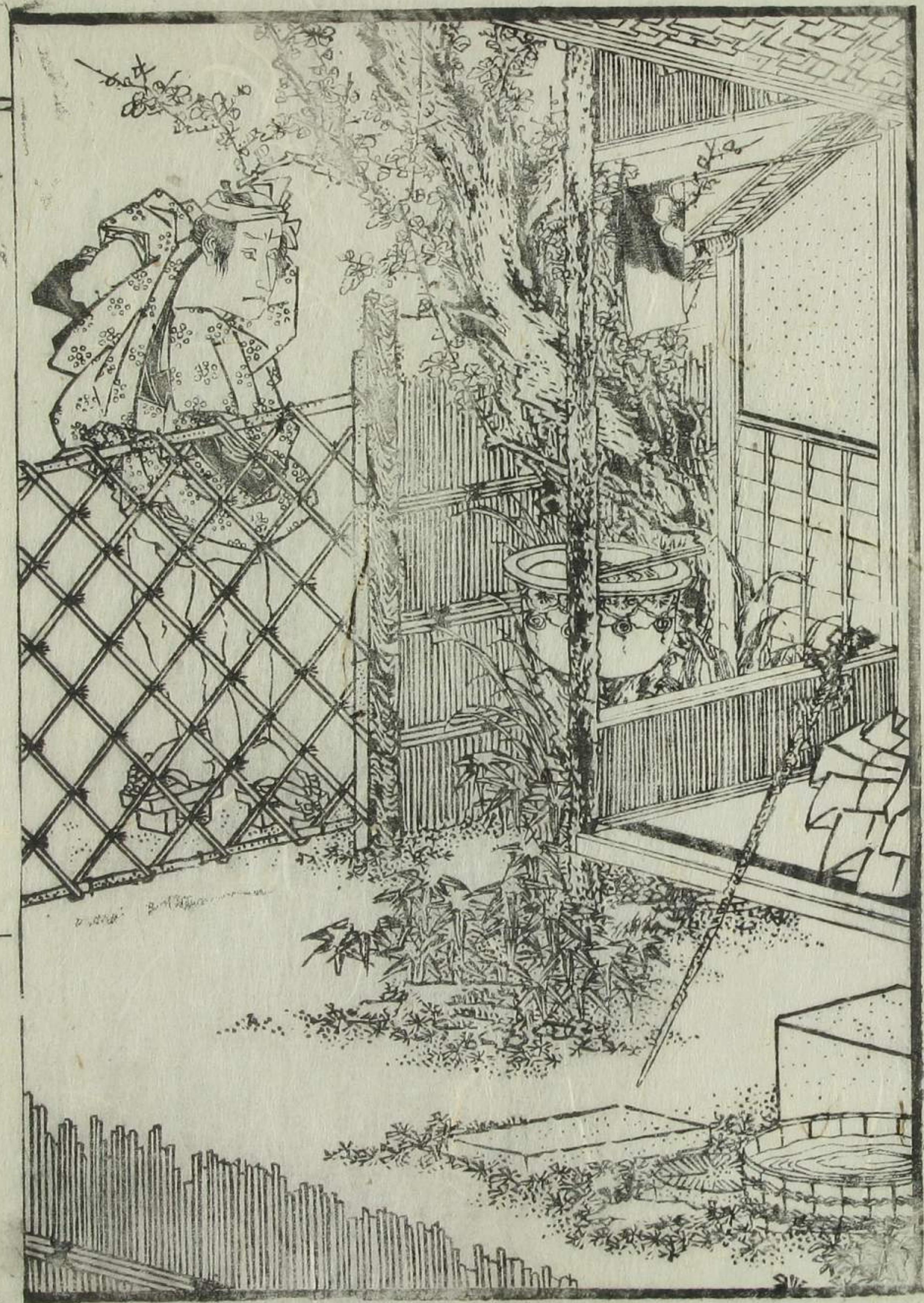
龍次郎。ふ向ひ。今晩ハ四兄君浦右衛門さぬの。夜。ひれぞりの。ゆ
向と持拂の扉。ひづれに香花をほする。おもわ。表の方は。を高く。是
ハ諸国。法場へ。六十六部の大糸妙典を納め。やまと大癪を発せ。く。
遠道と着縁を。う。来門。す。今晩の。病を取り。損ひ。翁。義。及
び。ち。す。宿。ふ。何。桑。所。少。屋。の。間。よ。ま。つ。と。一。夜。を。明。さ。せ。る。そ。う。が。
こ。き。よ。う。と。と。功。徳。ハ。ま。ー。と。安。く。山。林。ハ。游。次。郎。を。か。へ。り。こ。く。
君。志。の。よ。ー。あ。や。四。兄。君。の。遠。夜。す。當。り。行。暮。ー。る。ひ。旅。宿。の
宿。す。ひ。ま。と。無。下。よ。せ。と。情。る。だ。よ。せ。い。ま。が。在。く。一。夜。の。宿。を
貸。ま。つ。ま。き。を。予。細。ハ。あ。く。じ。源。嘉。萬。ど。ハ。田。守。さ。ざ。ら。袖
み。じ。の。奈。る。あ。ら。と。と。れ。て。袖。外。何。が。さ。し。親。父。ど。の。が。居。ら。ず。す。

小子。ふ。此の君の内達夜、旅宿の宿つとをあつて、辛ひ
片鬚のうぶきの名宿か鐵とびむへ遠善候事ハス。す。
せめて一夜の良宿や。圓向とてはまほのまづか。頃かとお見事
ひう。といひ。父本教がざらん。とくへ。呼び入る。くじらす
小梅もすよろこび。旅宿よひ。ひ。今宵ハ爰の内も。さるへた人の唇
とあつたゞが。幸ひつゝあるへ。圓向か。ゆき。その代み六何
あくと今宵の宿。まつせし宿。寒くと一晩をあく
のとと切ひ。額よ旅宿もこまへ。廣大無邊の山巒
きと草鞋と。そく様さまへ尾。よ。小梅ハこうへ。大金のゆ
湯を盡。汲く。旅宿がわたり。さて。出せば。是をとぞだう。あがり。

産。あし。み。ぞ。小梅。い。あ。と。び。旅宿。よ。お。向。し。今宵。ハ。我。ぐ。あ。ふ。
た。走。う。け。四。主。入。の。届。日。と。當。り。と。び。何。幸。と。う。と。く。圓。向。と。の。
玉。と。額。も。よ。旅。宿。ハ。お。島。波。何。か。宿。圓。向。ハ。其。家の。被。日。う。と。び。
き。と。す。期。く。一。夜。の。良。宿。教。よ。額。う。と。ハ。念。波。よ。ま。の。母。と。生
い。と。ま。が。赤。年。の。人。く。う。と。ふ。と。君。の。食。日。う。と。と。旅。宿。と。さ
や。圓。向。と。せ。ん。と。と。旅。宿。と。さ。夜。と。と。も。旅。宿。よ。旅。宿。と。て。志。入。の。真
福。と。い。の。る。べ。り。び。旅。宿。と。と。良。宿。と。り。よ。山。梅。ハ。む。詫。と。ち
ら。ぶ。旅。宿。圓。向。と。と。良。宿。と。と。良。宿。と。と。良。宿。と。と。良。宿。と。と。
と。と。む。た。く。り。の。旅。宿。と。と。良。宿。と。と。良。宿。と。と。良。宿。と。と。良。宿。と。と。
うち。ある。の。ある。み。ぞ。旅。宿。ハ。宿。と。宿。子。の。宿。と。押。率。山。梅。と。宿。と。

ト間へ入る。やがて小梅の納戸を出り立つ。今日の原瀬安
も例ふうに坂のあたり。落ふます四散する。明日の善惡ま
よ一度、坂のあたり一日限り。ふとまむほどのうなとりへり。うるる
あやゆうる夏のそより。から時々憂を拂ふ。翠巒酒とりのあら
まく夏あらへ。幸ひ旅僧も泊ともひく。ト走り村の酒肆へ
りてこの下どよ袖外どりと只二入ひ細くもあらん。うまと。廻守へ
とりひしきく小梅が忙గこゝへ走りさりぬ。跡よ二入ハ額とあこせ
りゆう敵とあもせ。目は対面左へ錦とかぎり。本領安堵する。まぞ
倘々我へ運轉く。蓑文太がゐふ返の絶ふせく。とくせんのくじ
蓑文太が病死する。まぞうが我へ。生埋木の花。筆云まうかきの上

冥土の凡へばどうりと。只づ刻も迷く。蓑文太をあき一種諸とも本
貫へ持ゑて。ふとび唐琴の家と起したきの哉とあく。ひを
碎くあり。外向の方よ車の。うち音きとへと。蓑ぞくと童の豈
搖せきそ立ち体よ體を郎へ何うりふや。このびあうて見であれ。
見るよりまた一箇の癡病を車に。あせく。織のやの辺りよひき。
たるふぞありけり。次郎へこよせ。ある猿猿や。宿世あ
あくして。うう業病よ苦。もとを食。さと寝るやあらん。すらん。
今宵も。あらむ。兄の忌日。うよ。ひだりの旅を。ちの飯を器よ
い。金く外面持出のと食ふむ。今宵ハ我志日。うよ。山を
まのうき方ひとすんとする顔を。を食いつぐ。お細め双眼。眼を



本草綱目 卷之三

浮城の難ハ唐突に謀る。而してさのう頃廻と懇意ある。ひど
權ハと偕名ある。ひとへふあくまかとり。而は次郎ハ大手を繕ひた
委一きりをわる。ひつむらさ。奈何ふ。謀次郎とより
うが。去る頃ハ子細五と。權ハと偕名する。が。お便。何人よ
きてかう委一きりをあつま。彼の片岡山は餓ぐる人の多く
う。その俗性と破まりと浩々と向へば全餐。ひづく。兩眼をま
だき。また天網恢く隠ふと漏らさじ。こやくん。汝よちるゆ
汝よ入る。因果報報の理極へきふあくす。折も少子ハ内秀が先と称
らひゆ。旧鳥蓑丈太と。りかのうりと。彼と醫るく謀次郎。蓑丈太
君。あつた。わ。あ。み。き。猶も落村く。かく自ら名す。ある。ハ逃げきる業すもあらず。さて

小紫が。すくも。安らひつらう。我父も原。ある。武士。く。脅。平次
左うとり。者。う。しが。我へ初かみて。父母。別。死。ふ。と。さ
よ。其中。ふ。因信列。ふく。ぬ。兄う。浦右。門。どく。令室。柱。の
ヒ蜜通。一。妻。藤花。殺。其後。笛吹。岐。ふく。兄。浦右。門。どく。を。切
害。ふ。そ。ま。又。諸国。を。編。並。す。男。麻。山。の。城。主。と。う。或
株。櫛。柄。組。の。侠客。と。う。因公。と。ま。名。て。曲輪。を。保。徊。く。金。銀。紋
宣。を。掠。め。人の。命。と。屠。つ。し。る。數。を。あ。く。す。娶。よ。湖。
その。報。の。來。そ。と。す。と。く。世。ふ。稀。き。業。病。を。う。ひ。と。蓑。丈。太
とも。因。公。と。も。見。ま。る。人。う。だ。は。我。う。ら。疾。疾。く。期。て。六。世。存
ゆ。余。う。ひ。う。け。且。ば。よ。る。ね。來。り。身。が。よ。れ。う。と。を。ま。

うらばせめく赤木の苦悶とのまこと。渠がおじく、渠の朱
去さうからぬよるの願ひあり。我曰く若文太うがら。私く病の
ふ回体の變りものとおもへり。渠うありて実の敵蓑文
太さうとよふものあるべから。游次郎とあらぬを食の首をすく。
敵蓑文太をすくへどく。上をあきむくとりこれしま斗りごく
原木を我病ひハ找藻花木の怨魂のうに悪よして冰姿痘を懲
申せし折ハ怨魂も未くずかる病ひもさうり。彼の正室をう
さひ。後找が怨靈再び我とあやまつては病ひと発さへ
彼の痘を以て我惣男を照へ。病ひの本役せんハ安めうちの
その時緊やく召められて四男とおきてハ奈良と云を巧みにひく方

むろた不る年あらる籠次郎をと向て。ひのうちふやかく今敵蓑
文太が來り。更に袖ふす物語るとも渠は疋前うまで惣男をう
さえらへ首尾うくおきとく後手く子細を詰つせと。身を内
に入り大切よ秘ひ乍り冰姿痘を取つひ。再び外面(持出)を喰
にゆけ。蓑文太ハ袖載き錦の裏の絹とくへ痘衣のやく惣男と
てをば否や美や今と年齢へ雖墓の脊も異うらず。かまひこへ
たる麻病の旭もむづく要のひへ法ゆきへと蓑文太う昔の容
立へ。もうとまく完かと參ひ。あらぬや歎へや。は産をすり
得へ。よしと乞食の容ようし。爰ふ赤く名乗り。を誠とひ
ぬ。冰姿痘を吸せしハ愚うる小童ふる豫をす。因爲に我乃弟、お

探さんと他国にて家をあらう。用者止のまゝ總角にて
小梅と塞の下部をうりよみが稚き恐れんやもくと汝還浦
ユ一鷗翁四郎をも奪ひ返し。一ツのみ妹小繁。汝うそ見つけられ
歎討は五分くまとあくまふ喰い尽さる狗ふ駒次郎ハ大の鳴り
む且蓑文太先達く玉川あくまうりと、山紫う夢ふ感して。又う
せ。又や我をくまうて。永姿院をうそひうとす。ゆりテ歎き
ひくもくまうて立上りく陽負せよと。力の柄を握りつら既又枝を
も。所と是のとて丁と潜り一つ、端廊う翁とやひては蓑文を立
んきどく虎の巣と極も圓削ちよととくとあみ倒せ。蓑
とあせきど駒次郎ひごと強氣の蓑文太よりびび。勝よあせた

この所へ折充庚る梅の下四喜。英昏るまで秋の夜のくまゐ月を照
ミ我家又通づき遙うふよき。何うよきハコノ内など両箇あらそひ
居るあらき。梅どうぞくわあつた。とよまハ歎蓑文太が駒次郎
を引捕らへ瞬不くよとよある。仍様子四喜房斯と見る。うも。ど
かづく蓑文太を引ひけ。駒次郎と後まうひ。跡へや跡で余
印実の名ハ回を蓑文太。う入り歎揚負せよと結秦。が。蓑文太も
豫く手四喜房が。身体ひまく。うまう。逃げとす。すと逃げよ。
うねく準備やきりけ。竹杖よきこみ。一刀を抜き。未座よ
坐と切う。まが。くらべと受流し。習へひとみ戦へ太刀音袖从ハ
何うよみやと塞う。門口へりごとくま。子四喜房と駒次郎が歎囁

蓑文太とさうふ取りこめ切張づまへ一大事となりやまと。立てよ
らね。途方ゆく奈何ハせんと氣せあせる。折ふふるぎや一處の隣火
空中うち飛まう侍ふ落るふと。忽要務のぞく。小紫が容
あくま。袖外がうろへまうり。衆抱むるよと見けふ。今とひ歩
自在きぬ。是の立とて殊ぐよとせらへる心のるを業ゆや。大す教び
あひまへく家より。納戸の内あたへるの腰。一腰。袖外加勢付
えふと。變うけるべら切こと。だ。龍次郎と四三房ハ、あふきの
手をも。不審をも。壁へるもあくせず。ひどみ戦ひ。不るの蓑文太三
方。敵をうけとさへ。生れを見合。逃げと見る。桂藤の毛を小紫ら
が幽鬼幻のじく立あへよ。とをさゆこべる。行難よ。蓑文太ハ、徐力毫

蓑文太とさうふ取りこめ切張づまへ一大事となりやまと。立てよ
らね。途方ゆく奈何ハせんと氣せあせる。折ふふるぎや一處の隣火
倒れ伏せ。正と手四三房袖外のつるをとせ。六。龍次郎へもぎ
て首をうき。切く立てる所へ。小梅ハ、廻ひぬひぬ。どう。五。酒と水
立ぬりは体と見て。放す。うござり。期。手四三房ハ、袖外が是の立
しを奈何。うき。と。腰。袖外。小紫の幽鬼のふと。腰。と。腰。
足の草へよきと物語。と。奇矣の。おひと。居る所へ。又。酒と水
も。床。と。邊。よき。と。手。と。腰。と。腰。と。腰。と。腰。と。腰。と。腰。
前。お。若。や。せ。と。腰。と。腰。と。腰。と。腰。と。腰。と。腰。と。腰。と。腰。
今の。腰。と。腰。と。腰。と。腰。と。腰。と。腰。と。腰。と。腰。と。腰。と。腰。と。腰。と。腰。



太さかりて來らんと見上る。間のうち更に變高く「お入もよし」と入る。
腰帶からぬれのぬだうをあくまくと一首の歌詞とは、餘く立
ちのひ後後によくまとへ十間ゆく委へく破りたして、貴人を小串
の家後唐突浦をあひぐく、會合は船次郎どのふくあけき。食店
ハ、絶海とよぶと去るに大明へ渡つて、ありうち金奥をば日本へもち
渡つて、浦を盡つて、あがゆきとく自引公へ献じたり。が、その亂
次々に、えりへりへりへりへりへりへりへりへりへりへりへりへりへ
度をうむせても全く、商業のうす所かとあるべし。眼も、
火とくもあらず。おと本意とひざひる十六是、もとて、古端のみあづく
みあるくす。おと本意とひざひる十六是、もとて、古端のみあづく
べ。猶又、よ四三房ども、歸る我志の玉座あり。と、と云ひ

て、賀の子のとて、よまむちをひく。賀佛の廟かへひしけ、こよひふ
先達くそ四三房がよむうけ殺し野中の井戸へ葬じと聞ひ。
小梅が、おと長吉有姿みて、賀のうちうつ坐す。よ四三房が、歸るを
まごうげくふぞ。よ四三房が、歸る、更よふ審をきく。よ、まごう
警るに、絶海禪院みむしむせ。我不慮あや、すちふぞ。しに舞け
殺せし長吉達言ひよむせ。壁中の古井へ理葬せしよ。りうつる事よ
て存命ありや。招魂の法とやらんをせしよ。よ、うとひす。全くよ四
禪院へ返とあひて。さむる怪しき体みあくす。よ、うとひす。全くよ四
禪院へ返とあひて。さむる怪しき体みあくす。よ、うとひす。全くよ四

まことと以て掌と見るが爲る。梅をとむと更人よさへ且^シ知
きゆるまうたがゆゑよ草木なるとりと。彼の唐土羅浮山の梅[。]
化して美人となり。又我国みくも管相公の臣重卿[。]ハ篠山[。]飛[。]倒[。]
あり。すまうみう邊神紀といへ書ふ。千歳人參[。]小兒よむとる
と裁せたり。又徒然草[。]又土太狼[。]ハ船舟[。]食[。]兵[。]とりて敵[。]
と進みりぞけする事と書り。と見て皆感情の力のとりども猪の入[。]
て或人[。]と化[。]また海山を越[。]て飛行せしとど理外の足[。]は長[。]
吉[。]獲生せしもまづそのとく。汝[。]がおせ[。]梅[。]が身代りふ幸[。]め。
奈[。]何[。]とうとく會[。]ての頃[。]日暮[。]の辺[。]を看縁せしよ。或夜の夢[。]
一箇の童子[。]走[。]て我前[。]よひ[。]まづ足音[。]そらく山子[。]芝[。]原[。]の聲

位[。]清友[。]とよぐ者[。]年來[。]暮[。]みをうけ[。]人の親族過て余を
落[。]とま[。]我是[。]をちくとそとらぐ。こきす又前[。]世[。]の宿因[。]され
バ[。]一旦[。]彼[。]人の身[。]からざれ[。]ば[。]その業[。]をもて[。]雜[。]か[。]ハ我竊[。]ム
彼[。]人の素形[。]は變[。]じ。假[。]よ[。]手[。]四[。]萬[。]ど[。]く[。]見[。]う[。]る[。]べ[。]。財[。]物[。]仰[。]
世[。]中の井戸[。]の辺[。]へひりゆく。自らかうるふべ[。]と正[。]くと見[。]る[。]事[。]
直[。]ま[。]の野[。]中の井[。]の辺[。]へ往[。]て夕[。]よ[。]出[。]長吉[。]よ[。]あへ[。]り[。]う[。]が[。]こ[。]き[。]る[。]や
ア[。]と迫[。]く[。]も[。]同[。]よ[。]長吉[。]ハ[。]爰[。]のい[。]地[。]ふく[。]や[。]も[。]覺[。]へ[。]ま[。]と[。]娘[。]よ
さてこそと[。]爰[。]の一[。]五[。]一[。]十[。]を告[。]か[。]せ[。]即[。]時[。]芝[。]勝[。]村[。]をも[。]り[。]えん[。]と[。]學[。]
しき[。]赤[。]複[。]讐[。]の時[。]ひらぎ[。]ハ[。]長吉[。]と[。]すう[。]ひ[。]か[。]も[。]お[。]休[。]ま[。]婦[。]
が[。]大[。]望[。]の[。]うね[。]び[。]う[。]と[。]車[。]ひ[。]近[。]く[。]湯[。]を[。]飛[。]せ[。]き[。]バ[。]う[。]う[。]ご[。]じ

義に至ある西家を由と長吉小波へあす。暫時間緒共よ樂と
編集へ今骨肉が復讐んるを豫て初見バ此にてと僕私心中へ
長吉と張り山野へ移りてゆき。迨つまくを波打つま。小梅子西邊袖
久も禪仰が情を感づける。

梅花春秋卷之三終

